

マタイ福音書講話（5）

マタイ 3章 1～12節【洗礼者ヨハネ、教えを宣べる】

1～2節「そのころ、洗礼者ヨハネが現れて、ユダヤの荒れ野で宣べ伝え、『悔い改めよ。天の国は近づいた』と言った。」

悔い改めるとはどのような意味でしょう。一般的に悔い改めるといふのは、悪い行いをやめる、自分の罪を認めて懺悔することだと思われています。罪が「神様という的をはずして生きる生き方全体」のことを指しているなら、悔い改めとは、的に向かって生きる生き方全体のことを意味しています。つまり方向転換です。神の言うことを聞く、神の言うことに従って生きるという意味になります。単なる人間の懺悔や、悪い行いをやめることではないのです。神に向かい懺悔、神の命令によって悪い行いをやめることです。自分中心ではなく、神中心に生活が変わることです。

では「天の国は近づいた」とはどのような意味でしょう。天の国とは、神の国と同じ意味です。ユダヤ人は神という言葉を使うのを恐れたので、マタイは天と言い換えています。私たち人間が努力して神の国に登る、神の国に行くのではありません。向こうの方から「神の国・天の国」がやってきたというのです。だから、天から来た国を受け入れることが人間には必要になるのです。「子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」

（ルカ 18：17）とイエス様はいわれました。神の国（天国）というのは受け入れるものなのです。具体的に、天の国・神の国というのはキリストのことです。天から来られたのはキリストだけだからです。キリストが近づいて来た。だからその方を受け入れ、その方に向かって生き始めなさいという意味になります。

3節「これは預言者イザヤによってこう言われている人である。『荒れ野で叫ぶ者の声がする。主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。』」

イザヤは洗礼者ヨハネのことを「荒れ野で叫ぶ者の声」といいました。この言葉はイザヤ 40：3からの引用です。イザヤはバビロンに捕囚となった民に告げます。罪が原因で神の恵みを失い、約束の地を失い、すべての自由と契約と希望を失ったどん底の民に語ります。神は既に次のステップを用意されています。奴隷の時は終わり解放の時がやって来ます。帰る準備をしなさい。目の前の現実を見ないで神の約束を信じなさいと語ります。

「主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ」とは、昔のイスラエルの民にとっては、故郷のパレスチナに帰る準備をし、バビロンからイスラエルの地までの道を整え、まっすぐに帰る準備をしなさいという意味になります。横道にそれるなということ。70年もバビロンで生活をしていたら、その生活が慣れ

ているわけです。家もあり田畑もあります。それらをすべて捨ててイスラエルに帰るには勇気と決断が必要です。回心とはそういうものです。

ヨハネは声であり、イエス様は言葉です。言葉が届けば声は消えてゆきます。声は言葉を運ぶ務めしかありません。彼はイエス様の前を歩む灯です。イエス様を運ぶ器、先導者です。

4節「ヨハネは、らくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べ物としていた。」らくだの毛衣は預言者エリヤの服を思い出させます。(列王記下1:7~2:8) ヨハネはエリヤの流れを受け継ぐ最後の預言者です。らくだは重い荷物を負う動物であり、キリストのイメージです。ヨハネはキリストを来ているのです。革の帯は、巡礼者の衣服です。彼は自ら新しい出エジプトを、つまりこの世から神の国に旅立つ支度をしています。「いなごと野蜜」いなごは、苦行者の食べ物でした。荒れ野で神が与えて下さる食べ物です。

5~6節「そこで、エルサレムとユダヤ全土から、また、ヨルダン川沿いの地方一帯から、人々がヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた。」

洗礼者ヨハネは、大洗礼運動をしました。普通ユダヤ人として生まれた人は洗礼を受けません。割礼だけです。外国人(又は異教徒)がユダヤ教に改宗する時に洗礼は授けられました。しかし洗礼者ヨハネはどの人も悔い改めて洗礼を受けなければならないといって「悔い改めの洗礼」を宣べ伝えました。民衆はもしかしたらヨハネがメシアではないかと思っていたので、全国からぞくぞくと荒野にいるヨハネのところに来て罪を告白し、洗礼を受けたのです。

彼の洗礼には「罪の告白」が伴っていました。今までのユダヤ教の洗礼にはなかったものです。それを祭司にも律法学者にもファリサイ人にも全ての人に要求しました。全信者に罪の告白をさせたのです。罪を告白するというのは、裸になるということです。ありのままの自分、弱い自分をオープンにしてしまうことです。飾りを取り去り、隠れることができないようにしてしまうのです。つまり、自分は特別だという意識を捨てさせたようとしたのです。

罪の告白(告解)が教会からなくなりました。信者は裸にならず、正しさに隠れて信仰するようになりました。それで人は神に出会うことが難しくなりました。教会の中で自分の罪を告白する人は、どこか自由があり、素直さがあり、神の香りがするし、信仰も成長します。しかし罪を隠す人は、どこか自我の匂いがします。

・「自分の罪を公に言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、罪を赦し、あらゆる不義から私たちを清めてくださいます。」(一ヨハネ1:9)

7~8節「ヨハネは、ファリサイ派やサドカイ派の人々が大勢、洗礼を受けに来

たのを見て、こういった。『蝮の子らよ。差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ。我々の父はアブラハムだなどと思ってもみるな。』彼はファリサイ派やサドカイ派の人々のことを「蝮の子」と呼びました。蛇の子=悪魔の子という意味です。自分たちは神の子、アブラハムの子孫だという優越感、選民思想を捨てなさいというのです。私は特別だ、私は変わる必要はないなどと思うなということです。神の前では皆罪人です。誰一人、神の助け、救い、赦しを必要としない人間などいないのです。どんな祭司も律法学者にもファリサイ人も、自分の力では救われないことを教えたのです。「悔い改めにふさわしい実」とは、この場合は「罪の告白」「罪を認める」ことでしょう。

9 節「**言っておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。**」神はアブラハム以外の誰からも信仰者を造り出すことができます。

10 節「**斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。**」自分の無力を認めない者、キリストの助けが必要であることを認めない者、自分の正しさを捨てない者は神によって切り倒されてしまいます。イスラエルの国はそれゆえに切り倒されてしまいました。

11 節「**わたしは悔い改めに導くために、あなたたちに水で洗礼を授けているが、わたしの後から来る方は、わたしよりも優れておられる。わたしは、その履物をお脱がせする値打ちもない。**」洗礼者ヨハネは当時の人々から最も尊敬された預言者でした。旧約時代の最後の預言者マラキから 600 年間、預言者は現れませんでした。その間に、イスラエルの国はギリシャ人に支配され、マカベヤの独立運動が起りましたが失敗し、次にはローマ人に支配されてしまいました。人々は自分たちを解放するメシアを待望していたのです。しかし皆から期待されていたヨハネは、その期待を裏切って言います。「**わたしの後から来る方は、わたしよりも優れておられる。**」多くの人がヨハネを見つめていた時、彼の目はイエス様を見つめていました。彼は自分の使命と分際を知っていました。彼の使命はキリストを指し示し、彼に栄光を帰すことです。

「**その履物をお脱がせする値打ちもない**」先生の履物を脱がせるのは奴隷の仕事でした。弟子はしませんでした。自分はその奴隷以下であるというのです。キリストの履物のひもを解くことも、それに触れることも恐ろしくて自分にはできないといったのです。このイエス様に対する、洗礼者ヨハネと私たちの意識の違いには天と地ほどの隔たりがあります。私たちは本当にイエス様を知っているのでしょうか。ヨハネが畏れた方を、私たちは正しく畏れているのでしょうか。神を神とすること、キリストを正しく礼拝することは何と難しい事でしょう

う。

「その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。」

ヨハネは自分の「水の洗礼」とは違う、新しい「聖霊と火の洗礼」が始まるということを言っています。「聖霊と火の洗礼」とは何でしょう。よく聖霊派（ペンテコステ派）が「水のバプテスマ」だけでは不十分で、異言を語ったり、奇跡を行ったり、はっきりと神を体験する「聖霊のバプテスマ」がないと駄目だと言いますが、そういう意味ではありません。イエス様が洗礼を受けた時と、ほかの人が洗礼を受けた時の違いは何でしょうか。それはイエス様の時だけ、天が開け聖霊が鳩のように降ったということです。それは、イエス様が、ヨハネが行った水による洗礼と、聖霊と火による洗礼の二つを一つに合わされた新しい「水と霊による洗礼」を創造されたことを教えています。「火」は聖霊のイメージだと思ってください。イエス様がニコデモに「誰でも水と霊によって生まれなければ、神の国に入ることは出来ない。肉から生まれた者は肉である。霊から生まれた者は霊である。」（ヨハネ 3：5～6）といわれたのもこれと同じであって、この「新しい洗礼」を意味しています。

私たちは洗礼という言葉を聞くと、人間の悔い改め、信仰告白、回心というイメージが強いのですが、洗礼とは神の業、神の創造の業であるということも忘れてはなりません。この二つが必要なのです。後者だけだと幼児洗礼の場合のように、罪の自覚もなく、信仰もないまま信者になることになります。前者だけだと頑張り信仰になりファリサイ派のようになります。このバランスが必要なのです。洗礼はマジックや魔法ではありません。神の恵みと人間の応答の両方あって初めてその力を発揮します。

●榎本保郎牧師はこんなことを言っています。「律法を行わなければ律法がどんなものかわからない。私は今のプロテスタント教会の弱さの原因はここにあると思う。パウロの信仰がなぜはっきりしているか。それはパウロが学問をしたからではなく、一生懸命生きたからである。私たちは神の前に心を尽くし、力を尽くして主なる神を愛する、あるいは隣人を愛するという事に一生懸命になってゆくと、愛し得ない自分を見出し始める。そういうことが必要だと思う。その時、キリストが十字架について死んで下さったから、私の罪はこれで死んだのだと、イエスの十字架にすがらなければならなくなってくると思う。」

●「教会の中に個人を超越する権威がある。その一つが聖礼典（ sacrament・秘跡・機密）である。…それがあるが故に教会はその特殊な生命を保ち続けて来たのである。」「聖餐のない教会は言葉だけであって、使徒伝承の生命がない。聖餐は sacrament 中の sacrament である。」（逢坂元吉郎）

牧会していてつくづく分かるのは、人間は神のことを理解し、信じるには限界があるということです。肉は靈的なこと（神的なこと）を受け入れられないのです。人間的なものに頼れなくなった時、支えになるのは聖礼典だけです。私は若い時は「信じなさい。そうすれば清くなり、罪は辞められる」と教えられてきました。しかしいくら信じて清くなれず、罪を犯してしまう自分に苦しみ、救いを探求して、ついに聖礼典に到達したのです。聖礼典に頼らない人は、肉（自分の力）に頼る信仰をしています。ただし最初は人間の力で努力しなければなりません。努力して初めて、自分の限界が分かるからです。何も努力しないで最初から、聖礼典に頼っても効果が出ません。

12 節「そして、手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる。」

キリストが来ることによって、脱穀場で麦と殻がより分けられるように、神の国に入る人たちと、滅びる人たちが分けられてしまいます。本物が来ることによって偽物ははっきりしてしまいます。恵みには必ず裁きが伴っています。それはコインの裏表のようなものです。恵みだけという訳には行きません。キリストは御自ら、散らされている神の子たちを世界中から集められ、天国の倉に入れられるのです。ここでは神の子たちを「麦」と表現しています。